「顔を固められた主イエス」
（ルカによる福音書 9:51-62）

これまでのガリラヤ地方中心の活動から、主イエスはエルサレムへと歩みを向けます。エルサレムへの歩みとは、十字架への歩みに他なりません。その不安や恐れは計り知れません。そのとてつもない覚悟を、今日の福音では「エルサレムへ向かう決意を固められた。」と記しています。この「決意」という言葉は直訳すると「顔」です。神が定めたエルサレムでのその時に、主イエスは決然と顔を向けているのです。今日の福音では、主イエスのこの決意と対比されるように、弟子たち、そして主イエスに従いたいという三人が登場します。

弟子の二人、ヤコブとヨハネは主イエス一行を迎えることを拒んだサマリア人の村に、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言います。サマリア人とユダヤ人とは歴史的に犬猿の仲でした。つまり、弟子たちにとってサマリア人は歴史的にも、今、村に入ることを拒まれたという意味でも敵です。「彼らを焼き滅ぼしましょうか」とは、敵ならば滅ぼしても良い、という恐ろしい考えの表れです。しかしもっと恐ろしいのは、「主よ、お望みなら」と聞いていることです。自分たちに天の力を使わせて殺させて欲しいと主に迫り、自分たちの望みを叶えるため、神にそれを認めさせようとしているのです。ここに主イエスと弟子との違いが鮮明に見えます。ご受難へ向かう主イエスは、ひたすら神のみ心に従って歩み、敵とされていたサマリアの人々の元へも神の支配、神の救いを宣べ伝えようとされます。他方、弟子たちはサマリア人の命などどうでもよい。「敵」への憎しみに囚われ、すべての人を救おうとされる神の意思などそっちのけです。

続いて登場する三名の主イエスに従いたいという人々。一人目は条件をつけずに主イエスに従うと言います。主イエスは彼には、「人の子（＝主イエス）」の現実を包み隠さず教え、従う弟子も同じ境遇におかれることを伝えます。しかし、他の二人はどうでしょう。弟子たち同様、神の意思よりも別なものにとらわれていました。そんな彼らに主イエスは、ご自分がこれから歩まれる道にまっすぐに目を向けるように諭されました。

エルサレムへと顔を向け、徹底的に神の救いの計画に従われた主イエスにならい、主イエスによって示される神の国へとまっすぐに目を向ける者にこそ、神の国は開かれます。